砂ぼこり

上水敬由

今ではもう廃墟というか荒れ野というか、広大な空虚に還ったとでも言えそうな旧帝大の跡地に、これからどのような建造物が姿を現すか、たとえボヤ騒ぎがあろうが屍体が見つかろうが、とっくに縁の切れたこの身としては、まさしく〈知ったことではない〉のだ。

それはともかく、そんな場所でジタバタしていた半世紀ほど前のこと、ある先輩に誘われて福岡のＡＴＧ（アート・シアター・ギルド）友の会に少しばかり関わりを持ったことがある。

ここで、今は亡きＡＴＧについて何かしら説明を加えるべきかも知れないが、ネットで検索すれば、誰でも詳細な情報が得られる筈だし、そもそも私自身がそれほど詳しく知っているわけでもないので、省略させていただく。

なにしろ、当時、少なくともいくつかは「名画」と言われる作品を観ただろうと思うのだが、今となってはまったく記憶にないというていたらくなので、そもそもＡＴＧについて偉そうなことを言える身分ではないのだ。

さて、優しい話し方をする目の大きな先輩は、映画や音楽の鑑賞が趣味で、栗原小巻のファンだった。彼は〈映画は楽しめればいい〉という主義だったから、当時『キネマ旬報』などを席巻していたような、変に頭でっかちな評論は嫌っていた。

その先輩によれば、友の会の世話役だか何だかを務めていた方が、どういう事情によってかわからないが、身を引くことになり、このままつぶすのは惜しいということで、たまたま会員だった大学院生たちが役割を引き受けたのだそうだ。

しかし、彼らだけでは少しばかり不安だったのだろう、手頃な社会人を物色しているところに、友の会で知り合った先輩が引っかかったという経緯らしい。そして先輩の方では、引き受けるにしてもひとりでは嫌だから、手近でヒマそうな後輩（つまり私）を誘うことにしたのだ。

大学院生たちは、もともと友の会の運営を手伝っていたらしく、定期的な上映会の開催や会報の発行など実際の業務はまったく手慣れたもので、いきなり外から入ってきた人間にはほとんどすることがない。

というわけで、こちらも気が向いたときに彼らのネグラにしている工学部一号館の研究室を訪れて、とりとめのない話題を交換して帰る程度のつきあいをすることになった。

その雑然とした研究室には、ちょうど中東でもめていた時期だったので、意味ありげに、出入り口脇の壁にＰＦＬＰのポスターやチェ・ゲバラの絵が貼ってあったりした。

しばらく前のいろいろ騒がしかった時代を思い出して、表皮の痛んだソファーに汚れた毛布が掛けてあるのを見ると、反射的にヘルメットを探したりするが、もちろん、そんなモノはない。

長時間にわたる実験やレポート作成が当たり前の研究室なら、休憩に使う道具が、食料も含めて必要だろう。

ただ、そこには心優しい先輩を怖がらせる要素がひとつだけあった。それはひとりの無口な大学院生で、研究のためか生活のためかわからないが、何度も強烈な直射日光に曝されたらしい真っ黒な顔をしていた。その彼が、たまたま先輩が訪ねたときにソファーで寝ていたそうだ。

ドアの開閉に目を覚まされたのか、彼はやおら身を起こすと、立ちすくんでいる先輩をジロリと眺めて、何も言わずに出て行った。

たぶん、彼に悪気があったわけではないのだが、それ以来、先輩はどうも彼らの研究室を訪れることに抵抗を感じるようになったらしい。その大学院生が、いつも研究室にいるというわけではなかったのだが。

その頃、友の会の活動とどうつながっていたのかは知らないが、芸能事務所（たぶん）などとの関わりが出来て、定期上映会の際に名前も知らないようなタレントたちがときどき挨拶に来た。

たとえば、中洲の明治生命ホールあたりで開催したときには、デビューして間もないと思われる若者たちが紹介されて、照れ隠しなのか「フォーリーブスを目指します」などとふざけた感じで言ったのを覚えている。もっとも、そのグループの顔をテレビなどで見かけるようになったのは、更に数年経って後のことだ。

そんな芸能事務所との関係からか、本来の活動とは異なるが、ある女性歌手のソロ・コンサートを大学院生たちが主催することになった。主催といっても、今にして思えばおそらくは名義貸しにすぎなかっただろうが。

浅川マキという名のその歌手は〈陰々滅々〉とした暗い歌を唄うのだが、彼らの中に熱狂的なファンがいるのだそうだ。

先輩は、やっぱりというか、好みではないから行かないと言うので、これといった予定のなかった私がつきあうことになった。

コンサート会場がどこだったか、はっきり覚えていない。大学祭のようなノリで選択した場所だから、あまり立派とは言えない建物だったのは間違いない。

開演時間ぎりぎりに急ぎ足で入っていくと、薄暗い場内に、それなりの数の観客が座っていた。

客層のほとんどは若い、おそらく学生ばかりだろう。ざわざわと浮ついた雰囲気の中に、どこか背伸びしているような、

かすかな緊張感が漂っていたのは、主役の歌手のイメージが影響していたのだろうか。
ただ、最前列の中央に席を占めていた二、三人の客が酒を飲んでいるようで、ときおり妙に大きな声で騒いでいるのが気になった。
小編成のバンドが位置について、華やかさなどカケラもない足取りで歌手が登場すると、いっせいに歓声や拍手が起こった。
照明の中で歌手が立ち止まり、司会者の声に耳を傾けていると、じきに場内は静まったが、最前列中央の連中だけがいつまでも騒いでいる。
それをしばらくの間じっと眺めていた彼女は、やおら連中のひとりを指さして、近くに来るように手招きをした。
呼ばれた彼は立ち上がると、ステージに向かって行くでもなく、所在なげにその場に立ち尽くした。
小声だったので、私の座っている後部座席からは、何を言っているのか聞き取れなかったが、注意された彼は、ぎくしゃくとした感じで座席に腰を下ろすと、それまでの陽気さとは打って変わって、情けないくらい静かになった。
後になって大学院生たちから聞いた話によれば、このとき騒いで叱られた男というのは、例の先輩が怖がっていた彼で、上演後、楽屋まで謝りに行ったそうだ。
彼は、その歌手のことが本当に好きだったらしい。
「謝りついでに告白までしたのには参ったよ」と、それにつきあわされたリーダー格の大学院生は笑っていた。
告白された当人が迷惑に感じたのか、それとも面白がったのかはわからない。
こういう話を、報告がてら先輩にすると、先輩は意外だと思ったらしく、「顔は怖いけれど、けっこう良いところがあるのだな」という意味のことを口の中で言った。彼の純情さが何となく気に入ったようだ。
といっても、それから、先輩が彼と会ったり仲良くなったりした気配はなかったので、それは単にそれだけのことだったのだろう。
そうこうしているうちに、福岡ＡＴＧ友の会とのつきあいも一、二年で終わりを迎えた。大学院生たちが無事に卒業を迎えたのか、どういう進路を選んだのか、友の会のその後ともあわせて、私は知らない。
そして、私の方もやがて先輩に別れを告げて、博多での砂ぼこりにまみれる暮らしとも縁が切れたのだ。